

# 長江葛洲壩ダムの失敗と三峡ダム計画の再浮上

—— 中国大文化大革命期の国家建設における国務院業務組 ——

林 秀 光

はじめに

第一節 建設の決定過程

- 1 設計図から削除された三峡ダム
  - 2 周恩来の注意による三峡ダム計画の「生き残り」
  - 3 公式文献で唯一の「実戦準備」の表現
- 第二節 工事停止の決定過程

- 1 李先念主宰の会議
  - 2 周恩来たちの林一山への叱責
  - 3 周恩来による林一山への協力要請
- ① 一月八日会議
  - ② 一月九日会議

4 一月二二日会議で示された周恩来の苦衷

- ① 水利工作への万やむを得ない心情と自らの非
  - ② 三峡ダムへの「薄氷を踏むがごとき」思い
- 第三節 再建の決定過程

- 1 交通部とのあつれきと工事停止による莫大な損失
  - 2 三峡ダム計画の再浮上における谷牧の役割
- ① 魏廷琿との接触と三峡ダム計画の言及
  - ② 明確な「実戦準備」の発言
  - ③ 水運問題の先送りと三峡ダム計画の再浮上
- おわりに

## はじめに

三峡ダムの歴史はその下流に建設された葛洲壩ダムと切っても切れない関係にある。とりわけ、一九七〇年代後半における三峡ダム計画の再浮上は、葛洲壩ダムの政策過程と深く関係していた。

葛洲壩ダムは三峡ダムの機能を補完する目的で構想され、本来は三峡ダムの完成後または同時に建設すると長江流域規劃弁公室（以下、長弁）が提案していた。しかし、武漢軍区と湖北省革命委員会の強い要請に押され、七〇年末に湖北省の電力供給のために、周恩来と李先念の率いる國務院業務組（以下、業務組）が、十分に設計を詰める前に建設を許可した。<sup>(1)</sup> このため、七二年に工事の停止が余儀なくされ、再設計を経て七四年に工事を再開することになる。六〇年から停滞していた三峡ダム計画は、まさに葛洲壩ダムの建設が行き詰り紆余曲折した際に再浮上したのである。

にもかかわらず、葛洲壩ダムは三峡ダム建設の「実戦準備」として決定されたものであると三峡ダム推進派は一般大衆のみならず、鄧小平や王任重などの最高指導者に対して喧伝し、ある種の情報操作をすることによって政策決定に影響を及ぼそうとした。<sup>(2)</sup> そのいわんとしたことは、つまり葛洲壩ダムが完成した暁には三峡ダムは着工されるべきだとのことであつた。また、周恩来は七二年一月二日の会議で「私は『高壩』（三峡ダムを指す。以下同）について戦々恐々としている。深淵に臨むがごとく、薄氷を踏むがごとし」との思いを述べ、明らかに三峡ダムに対して懸念を吐露しているのだが、それは葛洲壩ダムに対する発言であるとされている。<sup>(3)</sup>

本稿では、三峡ダムの歴史と政策過程における推進派のまやかしともいえるそうした認識を是正すべく、葛洲壩ダムをめぐる周恩来、李先念、谷牧ら業務組の構成員による指示や会議での発言を記録した一連の詳細な議事録を中心に、その建設、工事停止と再開を決定した三つの政策過程のなかで、三峡ダムがいかに捉えられていた

かを検証する。その上で、周恩来の三峡ダムに対する見解と、葛洲壩ダムが約二年の工事停止による莫大な損失からの脱却を目指し、早急な再建の決定を迫られる過程で三峡ダム計画が再浮上したことを解明する。

また、葛洲壩ダムの政策決定において中心的な役割を果たした機関として、業務組が挙げられる。業務組は六七年四月に成立した「業務小組」を引き継ぎ、翌年六月から七五年一月まで国務院の臨時組織として存在し、周恩来と李先念の率いるもとで文化大革命（以下、文革）の混乱期における国家建設を主導した。しかし、業務組の「臨時」的な性格からそれについての研究が資料の関係上困難であったことに加え、そもそも文革に関する研究の多くは政治社会の側面に重きが置かれたこともあり、業務組についての研究はほとんど見られない<sup>(4)</sup>。本稿は、葛洲壩ダムの再建を図るなかで三峡ダムが浮上した経緯を通して、文革期の国家建設における業務組の役割および政策決定の構造を考察する。

## 第一節 建設の決定過程

葛洲壩ダムは業務組が武漢軍区と湖北省政府の関係者の強い要請を受け入れた結果、設計も不十分なまま着工したものであり、三峡ダムを念頭に置いたものではなかったことは拙稿で論じた通りである<sup>(5)</sup>。ここでは、葛洲壩ダム建設を決定した段階の議事録を再確認し、三峡ダム推進派である林一山の処遇と三峡ダムの捉え方を検証する。

### 1 設計図から削除された三峡ダム

この段階の議事録は、一九七〇年一月一日に行われた業務組構成員である李先念、李德生、紀登奎、余秋

里が参加した技術報告会と、一六日に周恩来が主宰した技術報告会のものがある。<sup>(6)</sup>この二つの会議を経て葛洲壩ダムの建設は決定されたが、このダムが三峡ダムの「実戦準備」であるとする議論の記録はなかった。それどころか、三峡ダム推進派の林一山は出席すら許されず、三峡ダムそのものも設計図から削除されていた。

一日の会議開始後しばらくして、李徳生（業務組で電力開発を主管）が「林一山を呼ぼう。反対派（原語：対立面）だから、彼を連れてきてほしい」と求めたところ、紀登奎もそれに同調した。この会議は北京で開催されており、林一山は任地の武漢から来て会場の近くで待機していたものと思われるが、この時まで入場が叶わなかったのである。

入室を許された後も、林一山に発言を促す者は李徳生のみであった。また、本来なら林一山は三峡ダム推進派として、この場で三峡ダムを推すべきであったにもかかわらず、会議中の発言は短い返答に終始した。

林一山は長江流域を司る長弁の主任を長年務めており、三峡ダム計画を推進する中心人物であるが、葛洲壩ダムを三峡ダムの補助ダムとして構想したため、三峡ダムより先立っての建設には反対していた。しかし、林一山は文革初期に打倒され、当時長弁内での影響力が弱体化していた。その上、葛洲壩ダムは元より折り合いの悪い張体学が中央から獲得したプロジェクトであったため、長江流域を管轄する部門の長でありながら、林一山は完全に蚊帳の外に置かれていたのである。<sup>(7)</sup>

そして、三峡ダムそのものが張体学らによって設計案から削除されていた。会議の終盤になると、張体学は「三峡ダムについて毛主席には意見がある。水電部内部で伝達したか」と問いかけて、自問自答するように、「毛主席は第九回党大会以降戦争を懸念しており、三峡ダムはもう考えていない」と林一山に聞かせるかのように続けた。その直後に、張体学が「三峡問題は……」と言いかけたところ、同じく武漢軍区の朱業奎が「削除した」と即答したのに続けて、「削除したなら、もう話すことはない」とあっさりとも会議の締め括りに入った。むろん、

ここでも林一山は三峡ダムが削除されたことには反発しなかった。

## 2 周恩来の注意による三峡ダム計画の「生き残り」

一方、同月一六日の会議では、周恩来は三峡ダムが設計図から削除されたことに気づき、「『高壩』はどこに置くのか」と質問した。

そこで周恩来は、下流にある葛洲壩ダムが三峡ダムに先立って建設されると、水位の上昇により三峡ダムの工事が困難になるとの説明を受けた。周恩来は、張体学らに対して、「君たち、この問題を考慮したのか？ 先ほど、君は水位の上昇による水運の改善だけに言及したが、『高壩』との関係についてはなにも言っていない。これは君たちと林一山同志の主張の主要な矛盾である。矛盾から目を背けてはならない。矛盾ははっきりさせ、解決しなければならぬ」と指摘し、三峡ダムサイトである三鬮坪の地図を見せるように要求した。

その際、周恩来は林一山に対して三峡ダムについて意見を書くように指示したのにつけて、「三峡ダムと葛洲壩ダムを二つ同時に建設することは不可能であり、情勢が許さない。第四次五か年計画中でも二つを同時に建設することはできない」とも強調した。また、周恩来はこの会議で、林一山に対して、「あなたの頭には全く戦争の観念がないのだから。(中略)『高壩』は、子孫の世代の話、二一世紀の話だ」と三峡ダムの早期建設の可能性を否定した。

## 3 公式文献で唯一の「実戦準備」の表現

葛洲壩ダム建設の決定に関する一連の公式文献において、葛洲壩ダムが三峡ダムの「実戦準備」であるとする表現は一か所のみであった。<sup>(8)</sup>

政策過程で葛洲壩ダムが最初に登場した公式文献は、その建設を求める武漢軍区と湖北省革命委員会による、六九年一〇月三〇日付の報告であった。ここでは、葛洲壩ダムによって三峡ダム建設に必要な「経験を積む」という表現が用いられた<sup>(9)</sup>。また、同年一二月一八日付の「長江葛洲壩水電工程説明」では、葛洲壩ダムの建設を先に行うことは三峡ダム建設の「教練である」と述べるに止まっている。

一方、同年一二月一七日に林一山が周恩来に提出した報告書は、三峡ダムのメリットについて詳述し、葛洲壩ダムよりも機が熟しており先に着工すべきであるとする彼の一貫した立場を述べたものであった。むしろここでも「実戦準備」の文言はなかった。

また、一二月二四日、周恩来が毛沢東へ送った報告においても、「三峡ダムについて、国際情勢と国内の対ミサイル爆撃技術の進歩、大型ダム建設の経験の蓄積に鑑み、第四次五か年計画期間中に考慮する」と述べるに止まり、葛洲壩ダムの建設は三峡ダムを実現するための布石であるとする文言はなかった。同様に、二六日付の毛沢東の指示にも三峡ダムについての言及はなかった。

初めて「実戦準備」の文言が登場するのは、毛沢東が指示を出す前日二五日付の、建設を許可する中共中央の指示である。そこには、「葛洲壩ダムの建設は、偉大なる領袖毛主席の偉大な理想である『高峡出平湖』（三峡ダムの建設を指す）を、計画的に段取りをつけて実現するための『実戦準備』である」とあり、これが公式文献における唯一の記述である。

この指示は通達として中共中央から関連省庁と長江沿岸の各省に向けて発布されたが、ここで重要なのは、この文件のみ上層部から下部組織に向け伝達されているという事実である。葛洲壩ダムは数か月の間に決定され、この通達と同時に毛沢東の指示も通達された。拙速に決定された葛洲壩ダムの建設を下部組織に納得させるため、毛沢東の意向と三峡ダムの「実戦準備」という文言を盛り込むことで決定を権威づけようとする意図がう

かがある。

## 第二節 工事停止の決定過程

葛洲壩ダムは着工後まもない七〇年一二月末、ダムの施工自体に問題が続出したことに加え、長江の水運に影響を及ぼしたため交通部が反発し、工事が続けられない状態に陥った。

入手が叶った資料からは、それを受けて七一年四月から翌年一月二日までに業務組会議が七回開かれたことが分かっている。それは、七一年の四月二八日、六月一六日と二三日、翌七二年四月一九日、一月八日と九日の連日、そして同月二一日であった。

その間、問題が顕在化してから一年以上経った七二年一〇月に、国家建設委員会副主任謝北一をリーダーとする中央工作組が派遣された。国家計画委員会、国家建設委員会、水電部、第一機械工業部、農林部の責任者が参加し、葛洲壩ダムの問題について調査が行われ、國務院に対してその設計案と施工に関する一連の問題を報告した。これにより、「葛洲壩ダムプロジェクトに一つの転機がもたらされた」と回顧されている<sup>(10)</sup>。

たしかに、後述するように、この中央工作組の派遣を境に、周恩来の率いる業務組が葛洲壩ダムの失敗を「国家、党の問題」として危機意識を持つようになり、本腰を入れて解決策を探るようになった。

### 1 李先念主宰の会議

拙稿で詳述したように、葛洲壩ダム建設は李先念が中心に決定したものであった。しかし、七一年四月二八日の会議において、李先念は「昨年（葛洲壩ダムの）報告時には誰も計画の草案について理解できていなかった。

当時は主に建設するか否かが主たる懸案であった」と杜撰さを認めている<sup>(11)</sup>。

同年六月一六日の会議には、李先念、李徳生、余秋里のほか、同年四月に業務組に加わった華国鋒も参加した<sup>(12)</sup>。葛洲壩ダムを積極的に推進した張体学が職責を尽くさなかったことについて自己批判を行ったが、それに対して、余秋里が「そんなことはない」と打ち消すように言った。この会議は一五時一五分から二一時五五分まで続いたが、埒が明かないまま閉会した。

後述するように、その直後二三日に李先念の病欠を受けて周恩来主宰の会議が開かれたが、翌年になっても、長江の水運問題は未解決のままであった。

翌年四月一九日に再び業務組会議で討議が行われた<sup>(13)</sup>。李先念は「長江を断ち切って、航行に影響を与えたことは極悪非道だ」と強い口調で発言した。秋余里からは、「閘門問題を侮ってはいけない。水運を重視しなければならぬ。それができないなら、むしろ発電しなくてもよい」と葛洲壩ダムそのものを否定するような発言まで飛び出した。李先念も「船が重慶まで行くことができなければ、全世界の笑いものになる」と発言するなど、水運問題に手を焼く様子がうかがえる<sup>(14)</sup>。

李先念が主宰したこれらの会議は解決策を見出すことができなかった。葛洲壩ダムの直面した問題がいかに複雑であったかがうかがえよう。同時に、張体学以外、李先念をはじめとする葛洲壩ダムを決定した業務組の構成員からは、責任を認める発言は一切なかった。また、これらの会議において、三峡ダムが言及されることもなかった。

## 2 周恩来たちの林一山への叱責

七一年六月二三日に周恩来が主宰する会議が開かれた<sup>(15)</sup>。周恩来は葛洲壩ダムについて、「このダムは灌漑の役



に立たず、洪水対策にもならない。見込めるのはただ発電と水運の改善だが、二〇〇万キロワットの電力はここのでなくとも手に入る。そんなもののためにもし水運を断ち切ることがあれば、それは途轍もない大罪だ」と二回も発言した。

この発言から、葛洲壩ダム建設を許可したことへの後悔の念とともに、顕在化した長江の水運問題の重大さがかがえよう。

にもかかわらず、周恩来は政策を決定した業務組構成員の責任を問うことはなく、「水電部は河川開発の覇権（原語…水上一覇）だ。交通部も主導権がとれるようにがんばらない」と叱った。また、なぜか葛洲壩ダムに反対であった林一山に苛立ちをぶつけ厳しく追及した。

彼は会議開始直後に林一山に対して「問題があれば、あなたに責任をとってもらう」ときつい口調で叱責したのを皮切りに、以後も林一山を名指して、「なぜ念を押してくれなかったのだ？ 君は長江の水運を重視していただろうに。三峡ダムができれば、長江の輸送力が何十本もの鉄道に相当するというのは君の名言ではないか」「意見書も書かせたではないか」と立て続けに糾弾した。

同時に、周恩来は「大事なことは、水運だ。水運が影響を受けることはあってはならない。将来『高壩』はこの経験と教訓を生かさなければならぬ」とも指摘し、三峡ダムについて言及している。

その直後に、林一山は三峡ダムの完成後に得られる輸送力が四〇本の鉄道に相当し、輸送量が四億トンになると持論を展開した。それに対して、交通部からの出席者が前年度長江全体の輸送量が一千万トンあまりであると発言したのを受けて、周恩来は「その四億トンはどうやって計算したのか、上海から重慶までの輸送量を言っているのではないだろうね」と問いただした。

それに対して林一山は「それは可能性のことです」と答えたが、李先念が「可能性といっても根拠が必要だ」、

「それは呉淞口（上海の近くにある長江の入り口）に造るダムの話ではないだろうね」と林一山を揶揄した。林一山に寛容な態度で接していた李徳生でさえも、「それは空中でダムを造るようなものだ」と呆れた口調であった。また、会議の終盤で、林一山が長江に生息する魚について曖昧な発言をしたのを受けて、周恩来は「君はいないと言ったばかりなのに、今はいるという。これを機に、水電部も自己批判をしつかりやらなければならぬ」と再度水電部に矛先を向けた。とはいえ、この会議では周恩来が怒りをまき散らしただけで、水運問題の解決の糸口は見つからないまま閉会した。

### 3 周恩来による林一山への協力要請

前述した七二年一〇月の中央工作組の動きを受けて、周恩来の主宰で翌月八日と九日の連日、そして二一日と三回にわたって議論を重ね、ようやく工事の停止が決定された。<sup>16</sup> 林一山が再設計を指揮することになったが、その過程のなかで三峡ダム計画が言及された。

#### ① 一月八日会議

中央工作組が派遣されてから、周恩来らの対応に変化がみられた。八日に開かれた会議で、周恩来は「長江で問題が起これば、それは一人の問題ではない。あなたの問題でも私の問題でもない。この国家、この党の問題だ」と発言し強い危機感を示すようになった。そして、林一山への態度を豹変させる。

周恩来はこの会議でも開始早々から相変わらず部下を厳しく叱責していたが、林一山への態度がきわめて軟化した。周恩来は、少し遅れて会場に入った林一山に対して、話を止めて声かけた。

「林一山、君は元気かい？」

「目がよくありません。」

「医者に行ったか？」

「行ってきました。」

「君は異論があるのでは？」

「異論はありません。討論したのですから、あとは仕事をいかに円滑に進めるかです。」

「異論は一切ないのかい？　そうは思えないね。(君は) 大局を念頭においている。」

このやり取りの直後に、周恩来は再び厳しい口調で元の話題にもどった。その後、林一山のことを「私は林一山とともに仕事したことはないが、林一山は臆せず意見を出す。それはいいことだ。(中略)。共産党員は真理を堅持しなければならぬ」とほめたのに続けて、「葛洲壩ダムの着工には本来) 一年間は準備すべきだった。我々は当時すぐに着工したくはなかったのだが、機を逃すまいとあなたたちがせっついた。もっとも積極的だったのは張体学だ。それに曾思玉同志」と林一山を持ち上げる一方、彼の宿敵である張体学に矛先を向けた。

紀登奎はそれにつづけて、「私も積極分子だった。当時張体学同志などは、『もし葛洲壩ダムに問題が生じれば、頭を天安門にぶら下げてもよい』と意気込んでいた」と発言した。

それを受けて周恩来は、「頭をぶら下げるなら、彼一人でなく全員がぶら下げなければならない。同意した我々にも落ち度はある。当時、朝鮮から北京に戻ってきた曾思玉同志は葛洲壩ダムの決定を待つつもりで、任地の武漢へ帰ろうとしない。我々は彼の態度にはなにか理由があるのだろうと考え、報告を聞いて同意した。我々が断固として同意しなければ、着工は叶わなかったはずだ。(中略)。今こそまさに『修正を加える』(毛沢東の指

示にある言葉を引用——筆者「時だ。もはや一刻の猶予もない」と言った。

このように葛洲壩ダムの決定経緯を振り返った周恩来らの回想からも、このダムに三峡ダムの「実戦準備」としての目的がなかったことは明らかである。

周恩来は「林一山同志、君に任務を与えよう。もし閘門が原因で航行不能や輸送力の低下が起これば、葛洲壩ダムの工事を停止するしかない。君には、一本の長江が何本もの鉄道に相当するという名言があるではないか？ 鉄道は一本でも中断すれば大事だが、ましてや何本もの鉄道に相当する長江だ。林一山同志、君に特別な任務を与える。船が通れなければ君の責任だ」と、林一山に責任を持たせて約五時間続いた会議の閉会を告げた。

## ② 一月九日会議

引き続きその翌日も、夜七時半から夜半一二時二〇分まで会議が開かれたが、周恩来は葛洲壩ダムの抱える問題の深刻さを知るにつれ、さらなる危機意識を募らせた。

ひとつは資金問題である。葛洲壩ダムの工事費について、「すでにどれくらい使ったか」と周恩来が問うと、返答は「二億六千万元」であった。周恩来は「張体学同志、湯水のように金を使ったな！」と呆れ果てた。

いまひとつは長江の水運問題である。長江を堰き止める工事によって七五日間航行が不能になるとの報告を受けて、周恩来は、「七五日間も！ 万が一閘門が使えなかったら、水運が麻痺するではないか。林一山同志、昨日あなたに任務を与えた。あなたが顧問だ。考えるように」と林一山を促した。

続けて、周恩来は「『低壩』と言うが、(三峡ダムと比べれば) 少し低いだけではないか？ まずはその『低壩』の概念を変えねばならない。(中略)。我々はまさにその『低水壩』の三文字に惑わされたのだ。林一山のあの『高壩』に比べて低いだけの話だ」と部下たちに翻弄された自分を悔しがっていた。

とはいえ、状況の打開には各分野の技術者を大量に擁する、長弁の管理者である林一山に頼らざるを得なかったものと思われる。以降、周恩来は林一山の言動に不安を覚えながらも協力を取り付けるべく説得を図っている。例えば、「私はあなたの説明に懐疑的だ」、「あなたはもともと先に『高壩』を建設したのちに『低壩』を作る」と主張したが、あの『高壩』はもつと難しいのではないか？ あなたは、閘門を簡単に考えすぎている。明確に説明できていない」と林一山の三峡ダムへの楽観的な姿勢に不信感を募らせていた。一方で、部下たちの議論を受けて、「これはだめだ。工事を停止しなければいけない」と判断した周恩来は、「林一山、あなたに指揮をとってもらおう。引き受ける気概はあるか？ これは長江でのプロジェクトだ」と強く要請している。

李先念も、「これは長江のプロジェクトだ。長江でダムを造っているのだ。葛洲壩ダムの設計に問題が生じた。長弁の責任者である林一山を頼ることはできないのか？ あなたは失敗を傍観してはならない」と決断を促した。最終的に林一山は「毛主席の指示したプロジェクトを、私がどうして傍観しようか。問題が生じたのは、私にも責任がある」と折れた。

そこで、周恩来は、毛沢東が葛洲壩ダムに下した指示を読み上げ、「ここから、林一山同志に討論を取り仕切ってもらおう。銭正英、張体学、王英先、馬耀驥、潘鴻、謝北一、袁宝華、あなたたちに三日間討論の時間を与えよう。三日が足りなければ、五日はどうだ？」と促したのに対して、各位が同意を示した。李先念が「林一山、総理があなたに責任を託したぞ」と重ねて林一山に念を押した。

それに続けて、周恩来が「主に設計だ。草案を提出してほしい。(中略)。長江で問題が生じれば、あなた一人の首では済まない。首をはねるなら、私が先頭に立つ。しかし、首をはねても仕方がない。これは国際的な問題だ。建国から二〇数年も経っているにもかかわらず、長江でダムひとつろくに造れず、壊れたとなれば、それは党史に残る問題だ」と問題の深刻さを力説した。加えて、三門峡ダムの建設にはソ連人専門家が参加していたこ

とを引き合いに出し、「葛洲壩ダムでは一人も外国人はいない」と外国人に責任転嫁ができないことを匂わせ開会した。

#### 4 一月二二日会議で示された周恩来の苦衷

##### ① 水利工作への万やむを得ない心情と自らの非

この会議では、周恩来は開始後早々、責任逃れと思われるような発言を連発した。<sup>(17)</sup>

周恩来は「確認したいが、(建設を許可した)元の通達は設計しないで施工してよいと指示したか」と聞いた。それに対して、銭正英は、「元の通達では初歩設計が終了した後に着工としており、工事現場で初歩設計を行う」と読み上げたところで、「しかし、通達について異なる理解がある」と述べてお茶を濁した。

そこに、紀登奎は「元の通達にはなかった」と付け加え、周恩来の意に沿う発言を行った。批准した途端、急いで着工してしまった」と付け加え、周恩来の意に沿う発言を行った。

しかし、李先念や紀登奎をはじめ業務組の構成員は、葛洲壩ダムを批准した時に、工事現場ではすでに一万人の労働者が動員されていて、ただちに着工されることを知っていた。<sup>(18)</sup>

紀登奎の発言を受けて、周恩来は「それは審査する必要がある。この問題は明確にしなければいけない。中央の通達において『三辺』(辺勘測、辺設計、辺施工)を指す。事前調査、設計と施工を同時進行的に行うこと)しているという指示があれば、我々は責任を負わなければならない、主席のやり方に従って、(責任を)下に押し付けてはならない」と言って、周恩来が毛沢東の指示を読み上げた。続いて、「通達では、それがいいね。急ぎすぎただけだ。二〇年来、水電部は何回も見切り発車を犯してきて、改めようとしなさい。私はあなたたちのこの文言、『努めて、二〇年来のダム建設における誤りを避ける』を非常に気に入っている」と言いかけたところ、林一山

がすかさず、「これは総理が毛主席への報告で書いた言葉です」と口を挟んだ。

突っ込まれた周恩来がいかなる表情をしたかは不明であるが、林一山の発言に対して、「報告では確かにそう言ったが、私は当時持ちこたえられなかった。一人は軍区司令、一人は張体学、騒がれていたら持ちこたえられなかった。毎回そうだった」と応じ、部下に押され気味の自分を諦める口調であった。

続けて、周恩来は「二〇年来、私は二つのことに関心を抱いてきた。一つは宇宙開発、一つは水利だ。これは人民の生命にかかわる大事である。私は素人だけれども、しっかり取り組まなければならない」と述べた。

議事録では、「宇宙開発」部分の内容は省略されているが、周恩来が水利について次のように感慨深く自らの万やむを得ない心情を吐露している。

いわく、「水利に二〇年間も取り組んできた。しかし、水利は少なくとも三千年の経験がある。これは科学の面においてだが、都江堰は科学的で、高水準で、創造的であったといえよう。二千年前にこのように高水準の水利施設があったのだから、二千年後のものはより高水準でなければならないはずだ。現在多くの科学実験が行われているにもかかわらず、いつも厄介なことが起こる。長江は一方に気を取られると他方がおろそかになり、常に不完全だ」と指摘した。

最後に周恩来は話を戻して、「中央、少なくとも国務院にも少々落ち度があった。直接的なものではないが、見切り発車を助長させた」と葛洲壩ダムを決定した自らの非をかううじて認めた。

② 三峡ダムへの「薄氷を踏むがとき」<sup>19</sup> 思い

葛洲壩ダムの決定は、業務組を実質的に仕切っていた李先念のもとでなされたものである。李先念は、この会議で周恩来に同調して、「こんな大きい長江で、『三辺』のやり方をするのは、じつに危険だ。(中略)。再度考え

てみよ。同志たち、再度考えてみよ。これは長江を堰き止めることだぞ」、また、「砂堆積は大きな問題だ。二〇〇万キロワットあまりの電力は、どこでも手に入る」などと発言した。

このように、李先念はこの期に及んでようやく長江でのダム建設の大変さを切実に認識するようになったが、それを軽率に決定したことへの反省はみられなかった。

周恩来は林一山に対して、「あなたはあの報告（七〇年二月十七日周恩来宛てのものを指す）にどう書いたか？ いまでもその立場を堅持しているか？」と聞き、林一山がまだ三峡ダムに執着しているかを確認した。それに対して、林一山は「堅持していません。いまは努めて葛洲壩ダムをしっかりとやります」と答えた。

そして、約五時間に及んだ会議の総括に、周恩来は、「林一山は『高壩』をいとも簡単に口にするが、私はこの問題について、戦々恐々としている。深淵に臨むがごとく、薄氷を踏むがごとしだ。過信してはならない」と三峡ダムへの強い不安と慎重な態度を示した。<sup>20</sup>

一方で、葛洲壩ダムの再設計にあたって問題が山積していると難儀する林一山には、「過去には実践がなかった。だから、これから造る葛洲壩ダムを三峡ダムの試験的なダムとしなければいけない。あなたは『高壩』を造ると主張したが、まずは実験として葛洲壩ダムを造ろうじゃないか。ここで現れる問題は、三峡ダムでも現れる。葛洲壩ダムをしっかりとやれば、林一山同志、それは将来につながる大成功だ」と励ました。

そして、三峡ダムが再度次のやり取りに登場した。再設計の初歩設計に二年もかかると林一山が答えたのに対して、周恩来は驚きを隠せなかった様子であったが、「急がば回れ。（中略）。それもいいか、一つの『試験田』としよう」と呟いた。このように、その際にも「実戦準備」という言葉が使われることはついぞなかった。

最後に、林一山が「初歩設計は総理の批准が必要」と求めたが、周恩来はそれには反応せず、「主に水電部と建設委員会が意見を出すように。（中略）。もしなにか困難があれば、報告を書いて、水電部を通して国務院にあ



げて解決するように」とかかわりを避けるように指示し閉会となった。

### 第三節 再建の決定過程

#### 1 交通部とのあつれきと工事停止による莫大な損失

同年一二月に葛洲壩ダムの工事は停止され、「葛洲壩工程技术委員会」（周恩来主宰の会議で決定した林一山を主任とする再設計を全権で担う組織。以下、「技術委員会」）が率いるもとで再設計に入っていた。葛洲壩ダムが直面したもつとも深刻な問題は、長江の水運であった。にもかかわらず、水運問題に関して、「技術委員会」内部で林一山らと交通部との間で意見が大きく異なり、収拾がつかなくなっていた。第四回に続き、第五回「技術委員会」は約二か月にわたる議論を重ねたにもかかわらず意見の一致には至らず、状況が膠着していた。<sup>(21)</sup>

例えば、交通部からの構成員である馬耀驥は、林一山がまとめた第五回「技術委員会」の報告書について、「報告では、必ず解決すべき重大な技術問題は基本的に解決済みであったため、設計案が決定できるとしているが、実際のところ、水運にかかわる砂堆積や水流条件などの重大な技術問題は、いまでもけっして妥当な解決をみておらず、ましてや解決済みとは程遠い」と指摘している。<sup>(22)</sup>

これに対して、林一山は李先念、紀登奎、華国鋒同志ならびに周恩来に対して、交通部の唱える「一部の必要不可欠な模型試験を済ませた上ではじめて、最終的に初步設計案の修正が確定できる」との意見は、「我々は現在の状況を考えると、その必要はないし、建設にも不利である」として中央の判断を仰いだ。<sup>(23)</sup>

当時、交通部では長江の水運の重要性を考慮すると、葛洲壩ダムを建設する必要はないとの議論まで飛び出して、ダムの存在そのものが疑問視されていた。<sup>(24)</sup>

一方、張体学も認めたように葛洲壩ダムにはすでに二億六千万円の投資が行われた。また、現場では三万五千人が待機していたため、毎年三、四千万円の維持費が必要となる状況であった。<sup>(25)</sup>

長期にわたる工事の停止による莫大な損失にもかかわらず、「現場では小競り合いが絶えなかったため」、谷牧が李先念の指示で仲介に入ったと後年認めている。<sup>(26)</sup> 文革中に一時期失脚していた谷牧は、国家建設委員会の主任と業務組の構成員に復帰したばかりであった。<sup>(27)</sup> 谷牧は、このような技術的、資金的に行き詰った状態を打開し、いち早く葛洲壩ダムの工事再開を目指さなければならなかった。

## 2 三峡ダム計画の再浮上における谷牧の役割

### ① 魏廷琿との接触と三峡ダム計画の言及

七四年七月三日のこの日は、谷牧と葛洲壩ダム施工の責任を負う三三〇工程局の常務委員との座談会が行われた。<sup>(28)</sup> 谷牧は冒頭で、この視察が「中央から与えられた任務であり、葛洲壩ダムの問題について意見聴取し、中央に政策決定の根拠を提供するものだ」と話し、「もう引き延ばすことはできない。八月か九月中に再設計の草案を決め中央に報告して批准を受け、今年の第四四半期から工事再開を目指そう」と工事再開のスケジュールを提示した。

同時に、「これは大型プロジェクトであるが、派手に浪費するものではない」と述べ、さらに施工を担当する現場監督者たちに対して、「あなたたちはみんな大型プロジェクトで仕事をした経験があるが、儉約の精神を持たなければいけない」と念を押した。そして、現場の浪費状況を訴える陳情書があることを告げ、「自分たちが処理するように。大衆からの合理化の提案を支持しなければならぬ」と警告しながらも処分を避けたが、浪費が蔓延していた状況がうかがえよう。

さらに、議事録によれば座談会中、谷牧が三峡ダムに言及した箇所が二か所存在する。

一つは、谷牧が再設計の草案にはさまざまな提案があり得ると発言した際で、唐突に「葛洲壩ダムは三峡の試験工程である」との一文を入れた。もう一か所は、会議の終盤、人の発言に割り込んで節約を促し、「設備を一部輸入するとしても、順序というものがあって、一遍に『武装』はできない。葛洲壩ダムをしつかりやれば、装備も整い、三峡ダムをやることができる」と発言し、ある種の「ご褒美」のようなニュアンスで三峡ダムに触れている。

じつはこの時、谷牧は二回も長弁の副工師魏廷琿の名前に言及している。魏廷琿は建国初期に林一山の秘書を務めていたが、のちに副工師、長弁副主任、主任、または國務院三峡工程建設委員会弁公室副主任として昇任し三峡ダムを推進する中心人物である。<sup>29</sup> 谷牧はこの日までに約一週間も現地に滞在していたことを考えると、魏廷琿をはじめ長弁の人間と接触した可能性がきわめて高い。

また谷牧は、自分がこの時に初めて水利問題に接したと話していることから、彼の展開した三峡ダムに関する言説は、魏廷琿ら三峡ダム推進派の影響によるところが大きいと考えられよう。

## ② 明確な「実戦準備」の発言

同年九月二日に葛洲壩ダム再設計草案の討論会が開かれたが、谷牧は國務院「負責同志」（業務組を仕切る李先念と思われる）の指示により、施工の早期再開の可能性が議題であると告げた。<sup>30</sup>

谷牧は、「二年間も工事を停止したが、もし再開できない場合、『三万の衆、一年三千六百万』（をどうするか）、自分には答えが出せない」と言った。ここで、谷牧はこの数字について説明せずに言葉を濁したが、前述したように、それは工事の停止中も約三万人の労働者を養い現状を維持するため、年に三千六百万円の資金が必要であ

るといふ、葛洲壩ダムが直面する現実であった。

谷牧は、「私の結論としては、決心してよい。葛洲壩ダムの工事は再開できる」と述べた。彼はその根拠について四つの点に分けて話したが、三峡ダムとの関連については次のように述べている。

「いわく、「葛洲壩ダムは三峡ダム計画の『実戦準備』であり、三峡ダムを建設する前奏曲である。現在の我々の経済発展の必要性からしてもエネルギー資源の開発の観点からも、葛洲壩ダムはただちに建設しなければならぬ。長期的なスパンで三峡ダムの建設を決心する必要がある」。この谷牧の発言によつて、最高指導層で初めて「実戦準備」という言葉が口頭で使われたことになる。<sup>(31)</sup>

また、「長い目で考えると、三峡ダムができれば、全国の電力設備容量が倍増する。我々は積極的にならなければならぬ。我々の代で三峡ダムが建設できるようにがんばろう。したがって、葛洲壩ダムを考える際には、三峡ダムも考慮に入れなければならない。必要であれば、葛洲壩ダムの発電機を何台か減らし、建設期間を短縮して、大型の（三峡ダムを指す）をやろう。総合的に考えても、その方が費用対効果が高い」と述べ、三峡ダムの発電の役割に期待を寄せつつ、二つのダムを関連づけて論じている。

続いて、谷牧は、「葛洲壩ダムの流量基準や砂堆積の問題について、すぐに三峡ダムに着手できることを念頭において考えてみよう。葛洲壩ダムを完成させたら三峡ダムに取りかかるのだと、大志を持たなければならぬ。それゆえ、葛洲壩ダムの建設は『三西』地域（湖北省の西側にある重工業の集中している地域）の発展だけでなく、三峡ダムの建設と関連づけなければならない」と力説した。

ここに、谷牧が三峡ダムの発電機能に期待しつつ、葛洲壩ダムの直面している問題を「すぐにも着工する三峡ダム」に託して解決しようとしたことがうかがえる。こうした谷牧の意図は、後述する「關於葛洲壩工程座談会的綜合簡報」（以下、「簡報」）にも反映されている。

③ 水運問題の先送りと三峡ダム計画の再浮上

九月一五日の討論会閉幕式で、谷牧が「簡報」を手に葛洲壩ダム施工の再開に合意が得られたことを宣言した。<sup>(32)</sup>この際には三峡ダムについて具体的な言及はなく、「葛洲壩ダム建設をしつかりやり、偉大な領袖毛主席の『高峡出平湖』の壮大な理想を実現させよう」と関係者の団結を呼びかけるに止まった。

「簡報」では、谷牧の討論会での発言を踏襲し、「葛洲壩ダムが効能を発揮し利益を得られるのは、三峡ダムの完成後であり、葛洲壩ダム建設で直面している水運問題もその時には解決しやすくなるだろう」との認識が示された。<sup>(33)</sup>

つまり、谷牧は工事の再開にあたりもっとも重要かつ手ごわい問題である、水運問題における交通部門との合意形成を三峡ダムと抱き合わせる形で先送りしたのである。

「簡報」は国家基本建設委員会による「(七四) 建発総字第五六五号」通知として、「湖北省革委会、水電部、交通部、一機部、六機部、財政部、商業部、衛生部、計委物資局、労働局」に発布された。<sup>(34)</sup>

同年一二月に林一山の率いる「技術委員会」による第六回会議の報告は、「葛洲壩ダムは三峡ダムの『実戦準備』である」と宣言した。具体的には、葛洲壩ダム工事の進捗に合わせて、「一九七六年末までに三峡ダムの初步設計に関する修正補足報告を完成させなければならず、(中略)、国家建委、水電部が来年第二四半期に三峡ダムに関する会議を開催し、今後の三峡ダムの測量調査や設計と研究について検討するよう提案する」と三峡ダムに関連した工事の許可を求めた。<sup>(35)</sup>

ここにおいて、「葛洲壩ダムは三峡ダムの『実戦準備』である」とする表現が公式文献に登場し、葛洲壩ダムの建設過程に盛り込まれることにより、約一五年間停滞していた三峡ダム計画は再浮上したのである。

おわりに

本稿は、葛洲壩ダムの建設、工事停止と再開をめぐる政策過程における三峡ダムの捉え方を検証し、葛洲壩ダムは三峡ダムの「実戦準備」として決定されたものではなく、むしろ工事が行き詰まり工事の停止と再開をめぐる打開策を探るなかで、解決策として三峡ダムが浮上したことを明らかにした。

第一に、葛洲壩ダムの決定段階において、林一山は会議への参加を許されず、三峡ダム自体も葛洲壩ダムの設計図から削除されていた。また、葛洲壩ダムに関係する一連の公式文献においても、「実戦準備」の文言が登場したのは、下部組織に通達する文献一か所のみであった。

第二に、工事の停止を受けて、周恩来らが再設計を担うよう林一山を説得する段階においても、三日間一五時間以上にわたる会議のなかで、「実戦準備」という言葉は登場しなかった。すでにガンに侵された体を引きずって毎回約五時間の会議を主宰していた周恩来はこの際、葛洲壩ダム問題をはじめ建国以降の水利工作について苦衷に満ちた思いを吐露している。<sup>(36)</sup>

先述のように周恩来は「建国から二〇数年も経っているにもかかわらず、長江でダムひとつろくに造れず、壊れたとなれば、それは党史に残る問題だ」と問題の深刻さと責任の重大さを力説した。周恩来にとって、当時中国で最大規模の葛洲壩ダムの失敗が痛手であったことは容易に想像できよう。周恩来は手のつけようのない局面の收拾を三峡ダム推進派であり、葛洲壩ダムの建設に反対した林一山に委ねる他なかったが、葛洲壩ダムを「試験的なダム」または「試験田」とする発言はまさにこういう状況下でなされたものであった。

また、会議の最終日に周恩来は三峡ダムについて、自分が「戦々恐々としている。深淵に臨むがごとく、薄氷を踏むがごとしだ。過信してはならない」と強い不安と慎重な態度を示していた。

第三に、最高指導層において初めて口頭で「実戦準備」を使ったのは谷牧であった。葛洲壩ダムの再設計段階では、長江の水運問題をめぐり林一山と交通部門が対立し、事態が膠着した。この間にも現場では約三万人の労働者が待機しており、年に三千六百万元が空費される事態に業を煮やした李先念が、谷牧を現地へ派遣し処理に当たさせたのは先述の通りである。

失脚から復帰したばかりの谷牧は、三峡ダム推進派からなんらかの助言を受け、葛洲壩ダムの直面する水運問題は三峡ダムの完成後に解決できるとして先送りし、交通部門の意見や不満をかわそうとした。彼は、「葛洲壩ダムは三峡ダムプロジェクトの『実戦準備』であり、三峡ダムを建設する前奏曲である」と明言し工事再開を強く促した。

こうして、葛洲壩ダム建設の決定段階では単なるスローガンにすぎなかった「実戦準備」は、三峡ダムが葛洲壩ダムの問題解決の糸口となることで、現実味を帯びはじめた。実際、その直後に林一山は早速「葛洲壩ダムは三峡ダムの『実戦準備』である」と明確に宣言し、のちにそれが三峡ダムをアピールする恰好の材料となった。

このように、三峡ダムが約一五年の停滞から「起死回生」し、その歴史における一つの転換点を迎えたのは七年であつた。三峡ダムが政策過程に再浮上できた要因は、まさしく葛洲壩ダムの建設の失敗であり、「葛洲壩ダムの失敗がなければ三峡ダムもない」と言っても過言ではなからう。

葛洲壩ダムは八一年に発電を開始し八八年に完成したが、それと同時に約五万人もの労働者の再就職問題と、その家族を合わせて約一〇万人の再配置という「負の遺産」にも直面することになった。三峡ダムの政策決定者にとって、葛洲壩ダムがもたらす電力、設備、人材は魅力的に映ったことと思われる。葛洲壩ダムの抱える問題と利点が八〇年代における三峡ダム建設の決定を促す要因のひとつとなったが、このように二つのダムは一貫して微妙な関係性をもっていた。

また、業務組と政策決定構造の関係について、以下二点を指摘しておきたい。

第一に、葛洲壩ダムの提案、着工、中止と再建およびその過程における三峡ダムの再浮上をめぐる政策決定は、まさに業務組が文革による混乱の最中にある中国経済を統括した時代になされたものであった。

当時中国で最大のダムプロジェクトである葛洲壩ダムをめぐる政策決定は、周恩来をはじめ李先念、谷牧、紀登奎、李德生、余秋里らが大きな影響力を及ぼした。そのなかでも、谷牧がのちに「あの時はやりやすかった。我々（自分と李先念を指す）が決心すれば、実行できた」と認めたように、七四年における三峡ダムの再浮上は、谷牧と李先念の強いリーダーシップにより実現したものである。<sup>(37)</sup>

第二に、葛洲壩ダムの再建および三峡ダムの再浮上をめぐる政策決定は紆余曲折を経ながらも、きわめて機密性の高い閉ざされた空間のなかでなされた。政策形成の担い手は、業務組の構成員、武漢軍区と湖北省政府の関係者、水電部、交通部と幾つかの関連する部門の責任者、設計を担当する長弁と湖北省の研究機関からの技術者と現場を担う施工監督者であった。また、議事録に記載された出席者を確認すると、政治運動での失脚や逝去の場合を除き各部門からは一貫して同じ人間が派遣されており、会議は数年にわたりほとんど同じ顔触れで行われている。決定は業務組の構成員が下し、責任を取るのも「頭をぶら下げるなら全員で」と一蓮托生の立場であることを周恩来が指摘したように、限られた範囲の人間で政策が完結していた。

このように閉鎖的な空間に風穴を開ける外的な力として、現場から中央に送られる「陳情書」と上から現場の調査に派遣される「中央工作组」が挙げられる。とりわけ「中央工作组」の派遣によって周恩来らが問題の解決に本腰を入れ政策を転換させたことから、その影響力は絶大であったことがうかがえよう。

同時に、風穴を開ける自助努力として、李德生が反対派林一山を会議に参加させるよう要請したことや、周恩来が林一山に反対意見を書かせたことが挙げられよう。筆者には、周恩来が葛洲壩ダムの失敗後に、その反対派



である林一山を厳しく叱責したことが大変不思議に思われたが、閉鎖的な空間での政策決定の危うさを回避すべく、「対立面」（反対派）からの率直な意見表明を期待していたことの裏返しであったのだろう。

このような政策決定の構造が、特定の時代である文革期に存在した臨時機構の業務組による主導という特有の環境下で生まれたものなのか、それとも中国の政策過程に一貫して見られるひとつの特徴なのかについての考察は別稿にゆずりたい。

(1) 拙稿「中国文化大革命期における国家建設——葛洲壩ダムの決定過程と國務院業務組」『法学研究』第九一卷第六号、二〇一八年六月。

(2) 林一山が七九年に王任重並びに國務院に対して、「周恩来が毛主席宛ての書簡のなかで、葛洲壩ダムは三峡ダムの『実戦準備』であると述べた」と報告した。「林一山同志給王任重同志並報國務院的信（一九七九年六月二日）」中出版物服務中心編『中共重要歴史文献資料滙編』第三二輯、『改革与建設問題選輯』第一分冊『中央領導同志对葛洲壩工程指示批示文件滙編（中共水電部長江葛洲壩工程局委員会弁公室一九八二年二月）』（以下、『中央領導同志对葛洲壩工程指示批示文件滙編』）、四四八—四四九頁、米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校東アジア図書館所蔵、二〇一〇年。

また、八〇年七月に鄧小平に対して魏廷琿も、周恩来が葛洲壩ダム建設を決定したのは三峡ダムの「実戦準備」のためであると報告した。魏廷琿「三峡工程の提出和決策」『百年潮』二〇〇九年第一期。じつは王任重も鄧小平も葛洲壩ダムが様々な問題に直面し危機的な状態に陥っていた期間には失脚しており、実情を知ることができなかったものと思われる。

入手が叶った資料のなかでは、林一山の言及は本稿で論じる七四年の動き以降、三峡ダム推進派による「葛洲壩ダムは三峡ダムの『実戦準備』である」とする議論の初出である。その後、三峡ダム推進派は文言の違いこそあるものの、一貫してそのような主張を展開してきた。

代表的なものは以下の通りである。

- ① 「一九七〇年に中央が葛洲壩ダム建設を先に決定した目的のひとつは、三峡工程の『実戦準備』のためであった」長江水利委員会編『三峡工程技术研究概論』六、三〇頁、湖北科学技术出版社、一九九七年。
- ② 「周総理は報告のなかで、葛洲壩ダムは三峡工程の『実戦準備』にできると述べた。また、「その後、周恩来はまた先に葛洲壩ダムを建設することは三峡ダムの実戦のための準備だと提起した」李鎮南著（長江水利委員会元総工程師）『治水側記』一五六頁、一二七～二八頁、中国水利水电出版社、一九九七年。
- ③ 「現実には直面し、周恩来同志は『葛洲壩ダムを建設し三峡ダムのための『実戦準備』とする』と提起した」林一山「関於葛洲壩工程の回顧」楊世華主編『葛洲壩工程的決策』二二二頁、湖北科技出版社、一九九五年。または中国科学院三峡工程科研領導小組办公室「長江三峡工程争鳴集（総論）」四六頁、成都科技出版社、一九八七年。
- ④ 「一九七二年周総理が深く工事停止を決定し、（中略）、『葛洲壩ダムは三峡ダムの建設のための『実戦準備』である』と提起した」林一山「関於葛洲壩工程の回顧」中国人民政治協商會議湖北省委員会学習文史資料委員会編『湖北文史資料・葛洲壩水利枢纽工程史料專輯』第一輯、総第四二輯、四六頁、一九九三年。
- ⑤ 「一九七〇年末、中央が葛洲壩ダム建設を決定したのは、華中地域の電力不足を解消し、三峡ダムを建設するために『実戦準備』を行うためである」喬生祥（葛洲壩工程局長）「葛洲壩水利枢纽工程是成功的工程」同前、『湖北文史資料・葛洲壩水利枢纽工程史料專輯』三〇四頁。
- ⑥ 「周恩来は、葛洲壩ダムが三峡ダムの『実戦準備』になりうると考え同意した」錢正英（水利部長）「跟隨總理治水（一九八八年四月）」『錢正英水利文選』四〇頁、中国水利水电出版社、二〇〇〇年。
- ⑦ 「三峡ダムの建設は、毛主席の偉大なる遺言であり、周総理も生前から手配を進めていた」林一山の李先念副総理並び國務院宛て報告書である「関於三峡水庫移民問題的報告（一九七八年一〇月二六日）」楊世華主編『林一山治水文選』三七五～三八〇頁、新華出版社、一九九二年。
- ⑧ 「中央が七〇年末に葛洲壩ダムを繰り上げて建設すると決定した。この決定を下すと同時に、周総理は葛洲壩ダムが三峡ダムの『実戦準備』であると明確に指示した」魏廷琿（長江水利委員会主任）「葛洲壩ダム工程建設中的幾個關鍵問題」前掲、『湖北文史資料・葛洲壩水利枢纽工程史料專輯』五三～五四頁。
- ⑨ 「周総理は、三峡ダムの規模が大きいためすぐには着工できないので、まずは先に低いダムを造って、三峡ダム

の『実戦準備』にしようと考えた。こうしてその年の八月に中央が決定した」魏廷琿「我参与三峡工程論証的經過」湖北省政協文史資料委員會、宜昌市政協學習文史委員會編『三峡文史博覽』五三頁、中央文史出版社、一九九七年。

⑩「一九七〇年末、中共中央が葛洲壩ダムの建設を決定した。その目的は、華中地域の電力不足の問題を解決すること、同時に三峡ダムの『実戦準備』とすることであった」王家柱（長江水利委員會總工程師、長江三峡工程開發總公司副總經理）『三峡工程規劃設計研究工作的回顧与思考』『中国三峡建設年鑑一九九四年』一八四頁、中国三峡出版社、一九九五年。

(3) 第一種資料へのアクセスが制限されるなか、周恩來のこの発言は三峡ダムではなく、葛洲壩ダムに対するものであるとの記述が広く三峡ダム関連の著述に登場している。例えば、林一山「周總理帶病主持最後一次葛洲壩工程會議」前掲、『林一山治水文選』六二頁。黃宣偉「葛洲壩工程技術委員會始末」、前掲『湖北文史資料・葛洲壩水利樞紐工程史料專輯』七八頁、傅楚武「付録・長江葛洲壩工程大事記（一九六九～一九九二年）」『湖北文史資料・葛洲壩水利樞紐工程史料專輯』三三七頁。そのほか多数ある。

そのなかで、下記の書籍にはこのくだりの記述がみられない。

曹心旺著『周恩來と治水』五八～五九頁、中央文獻出版社、一九九一年。この書籍は中央檔案館の資料をもとに上梓されたが、本稿でも利用した議事録をもとにこの日の會議内容を詳述したものであると思われる。しかしこの會議における周恩來の上記発言についての言及はない。

また、原文を忠実に再現したのはつぎの資料である。張立先「周恩來与葛洲壩工程」『中国三峡建設』二〇〇二年一月号。

(4) 程振声「關於『文革』中国務院業務組的若干情况」『党的文獻』二〇〇二年第三期。水新營「『文革』中的國務院業務組」『党史博覽』二〇一六年第七期。業務組が政策過程における影響や役割については、前掲、拙稿「中国文化大革命期における国家建設——葛洲壩ダムの決定過程と國務院業務組」を参照されたい。また、國務院部門の変遷を網羅した公式文獻においても業務組についての言及はない。中共中央組織部、中共中央党史研究室、中央檔案館共編『中国共產黨組織史資料』附卷一（上）『中華人民共和國政權組織』一九四九年一月～一九九七年九月』五六九頁、中共党史出版社、二〇〇〇年。

- (5) 同上、拙稿「中国文化大革命期における国家建設——葛洲壩ダムの決定過程と国務院業務組」。
- (6) 「国務院業務組負責同志聽取葛洲壩工程設計滙報時的指示（一九七〇年二月一日）」、「周總理聽取葛洲壩工程設計滙報時的指示」、前掲『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件滙編』四〇二—三頁、二四〇—三九頁。
- (7) 李先念によれば、当時林一山と張体学は相手を「反革命」と「機會主義者」と呼びあい反目していた。「李先念副主席、谷牧副總理視察葛洲壩工程時的重要指示（一）（一九七八年一月六日）」、同上『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件滙編』一七〇頁。
- (8) 公式文獻と出所は以下の通りである。
- ① 武漢軍区、湖北省革命委員會「關於興建宜昌長江葛洲壩水利樞紐工程的請示報告（一九七〇年一月三〇日）」、同上『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件滙編』三二八—三二九頁。
- ② 「林一山寫給周總理的信（一九七〇年二月一七日）」、前掲『林一山治水文選』三九一—三九四頁。
- ③ 「長江葛洲壩水電工程說明（一九七〇年二月一八日）」、前掲『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件滙編』三三〇—三三五頁。
- ④ 「周恩來給毛主席的報告（一九七〇年二月二四日）」、同上『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件滙編』二頁。
- この原本は毛主席と林彪宛てになっている。前掲、拙稿「中国文化大革命期における国家建設——葛洲壩ダムの決定過程と国務院業務組」を参照されたい。
- ⑤ 「中共中央關於興建宜昌長江葛洲壩水利樞紐工程的批復（一九七〇年二月二五日）」、同前『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件滙編』三頁。
- ⑥ 「毛主席關於興建長江葛洲壩水利樞紐工程的批示（一九七〇年二月二六日）」、同前『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件滙編』一頁。
- (9) 七二年六月二三日會議で、周恩來がこの文言は林一山の要請で入れられたと指摘した。それには林一山が反論しなかったことを考えると真実であったと思われる。
- (10) 前掲、黄宣偉「葛洲壩工程技术委员会始末」『湖北文史資料・葛洲壩水利樞紐工程史料專輯』七七、一一三頁。

- または、傅楚武「付録…長江葛洲壩工程大事記（一九六九～一九九二年）」『湖北文史資料・葛洲壩水利樞紐工程史料專輯』三三七頁。
- (11) 「李先念在國務院業務組聽取葛洲壩樞紐工程匯報會上的講話（一九七一年四月二八日）」（水電部葛洲壩設計方案討論會『簡報』第一期）『建國以來李先念文稿』第三卷、一四五頁、中央文獻出版社、二〇一一年。
- (12) 「國務院業務組負責同志聽取葛洲壩樞紐布置修改方案匯報時的指示（一九七一年六月一六日）」、前掲『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件匯編』四〇～六六頁。華國鋒が七一年四月に業務組に加わり、九月三〇日に副組長になった。
- (13) 「國務院業務組負責同志聽取張体学同志匯報時的指示（一九七二年四月一九日）」同上、『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件匯編』九九～一〇六頁。
- (14) 八一年に李先念が葛洲壩ダムを再訪した際に、「これが社会主義のプロジェクトだ」と豪語し、「三峡ダムができればもっと偉大だろう。『苦恋』を書いた者を連れてきてみせるとよい。（中略）。蔣介石も南津関で三峡ダムをやるうとしたが、あれは口先だけだ。彼には無理だ」と強調していたが、この時は手を焼いていた。「李先念副主席視察葛洲壩工程時的談話記録（一九八一年一〇月六日）」、前掲『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件匯編』二八九～二九〇頁。
- (15) 「周總理在聽取葛洲壩樞紐布置修改方案匯報時的指示（一九七一年六月二三日）」、「中央領導同志聽取葛洲壩工程匯報時的指示（一九七一年六月二三日）」同上、『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件匯編』六七～七〇頁、七一～九八頁。
- (16) 「中央領導同志聽取葛洲壩工程匯報時的三次指示（一九七二年一月八日、九日、二一日）」、同上、『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件匯編』一〇九～一三五頁。
- (17) 後年、葛洲壩ダムの責任問題について、李先念は党内で厳しく追及されたことを認めているが、当時周恩来への風当たりが強かったことも推測できよう。朱玉、程振声「李先念与三峡工程」高永中主編『中国共產党口述史料叢書』第六卷、四三二頁、中共党史出版社、二〇一三年。
- (18) 前掲、拙稿「中国文化大革命期における国家建設——葛洲壩ダムの決定過程と國務院業務組」。

- (19) 同前。
- (20) 前掲、「中央領導同志聽取葛洲壩工程滙報時的三次指示（一九七二年一月八日、九日、二一日）」、『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件滙編』一二五頁。
- (21) 前掲、黃宣偉「葛洲壩工程技術委員會始末」、『湖北文史資料・葛洲壩水利樞紐工程史料專輯』一〇三頁。李家鳳「葛洲壩主体工程開工停工復工的前前後後」、『湖北文史資料・葛洲壩水利樞紐工程史料專輯』一一三頁。前掲、傅楚武「付録・長江葛洲壩工程大事記（一九六九～一九九二年）」、『湖北文史資料・葛洲壩水利樞紐工程史料專輯』三三九頁。
- (22) 「馬耀驥による林一山への書簡（一九七四年四月二六日）」前掲、『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件滙編』三七七～三七八頁。
- (23) 「林一山による李先念、紀登奎、華國鋒並びに周總理への書簡（一九七四年四月二七日）」同上、『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件滙編』三七八～三八〇頁。
- (24) 前掲、李家鳳「葛洲壩主体工程開工停工復工的前前後後」、『湖北文史資料・葛洲壩水利樞紐工程史料專輯』一一二頁。
- (25) 前掲、黃宣偉「葛洲壩工程技術委員會始末」、『湖北文史資料・葛洲壩水利樞紐工程史料專輯』一〇三頁。または李家鳳「葛洲壩主体工程開工停工復工的前前後後」、『湖北文史資料・葛洲壩水利樞紐工程史料專輯』一一三頁。じつは当時、同じく湖北省域内にある長江支流の漢江で建設中の丹江口ダムが完工を控えており、その労働力の吸収もひとつの課題であったと思われる。
- (26) 「李先念副主席谷牧副總理聽取葛洲壩工程滙報時的重要指示（二）（一九七八年一月七日）」前掲、『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件滙編』一七七頁。
- (27) 前掲、程振声「關於『文革』中國務院業務組的若干情況」。水新宮『『文革』中的國務院業務組』。
- (28) 「谷牧同志在三三〇工程局常委座談會上的講話（一九七四年七月三日）」前掲、『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件滙編』一三九～一四二頁。
- (29) 中華人民共和國水利部弁公庁編『新中国水利（水電）系統組織沿革（一九四九～二〇〇〇年）』七二～九〇頁、中国水利水電出版社、二〇〇三年。

- (30) 「谷牧同志在葛洲壩工程設計方案討論會開幕時的講話（一九七四年九月二日）」、前掲『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件滙編』一四三～一四七頁。
- (31) 谷牧は自伝のなかで、葛洲壩ダムとの関わりについて口を噤んでいる。『谷牧回顧錄』中央文獻出版社、二〇〇九年。
- (32) 谷牧の發言の多くは、文革の影響で蔓延した派閥の弊害を指摘し、共産黨組織の健全化と黨員の役割を強調し、各部門の團結を呼びかけるものであった。同時に、彼は再度、葛洲壩ダムの投資が膨らんでいることへの最高指導層からの不満に言及し浪費を戒めた。「谷牧同志在葛洲壩工程設計方案討論會開幕時的講話（一九七四年九月二日）」、前掲『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件滙編』一四八～一五四頁。
- (33) 「國家基本建設委員會關於葛洲壩工程座談會的綜合簡報（一九七四年九月一日）」、前掲『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件滙編』一五八～一五九頁。
- (34) 同上、「國家基本建設委員會關於葛洲壩工程座談會的綜合簡報（一九七四年九月一日）」、『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件滙編』一五五～一六〇頁。
- (35) 「葛洲壩工程技術委員會第六次會議的報告（一九七四年二月二〇日）」同上『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件滙編』二八一～二八六頁。
- (36) 前掲、『錢正英水利文選』四一頁。
- (37) 「中共中央書記處書記、國務院副總理谷牧同志在聽取葛洲壩工程情況時的插話和講話（一九八一年八月二〇日）」前掲、『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件滙編』二七九～二八四頁。